

(小論文1日目)

問題用紙

次の文章を読んで後の問い合わせに答えなさい。

今ここに、水車をたった一つの生活手段とする一人の男がいるとする。この男は、祖父の代からの粉ひきで、粉をうまくひくには水車のどこをどう取り扱わねばならないか、見よう見まねでよく心得ている。この男は、機械の知識は一向にないのだけれど、いい粉を割りよくひくために、水車の部分々々の調整をするのはなかなか手慣れたもので、それによって生活し、暮らしを立ててきたのである。

ところで、この男がふと水車の構造を考えてみようという気を起こして、機械のことでのやらあいまいな意見を聞いたあげく、いったい水車のどこがどうしてまわるのかと、観察しはじめた。

そして、受け口からひき臼に、ひき臼から心棒に、心棒から車に、車から壠へ、堤に、水にと観察を進めていくうちに、とうとう、すべての鍵は堤と川にあると悟ったのである。この男はこの発見に有頂天になって、前のように、出てくる粉の質をくらべ、ひき臼を上げたり下げたり、それを磨いたり、また、ベルトを張ったりゆるめたりするかわりに、川を研究しはじめたのだ。それで、男の水車はすっかり調子が狂ってしまった。

そんなことはよしたほうがいいと、みんなも勧めたが、男はそう忠告した人たちと言い争ったあげく、やはり、川の研究を続けた。こうして、この男は、長い間、川のことだけをくり返し、くり返し考え続けたばかりか、その考え方の誤りを指摘した人たちとも、熱心に、何度も言い争ったので、しまいには、川がつまり水車だと信じ込んでしまったのである。

こうした考えを誤りだとするいっさいの論証にたいして、この男は答えるだろう。

「どんな水車も水がなければ粉をひけない。したがって、水車を知るには、どうやって水を引いたらいいか、知らなければならない。水の働く力を、水の流れ方を知らなければならない。だから、水車を知るには川を知らなければならない」

戸田智弘『ものの見方が変わる座右の寓話』より引用

この寓話はどのような教訓を伝えようとしているのかを説明し、それを材料にしてあなたが考えたことを600字以内で書いてください。

(小論文2日目)

問題用紙

次の俳句を鑑賞してください。

散る桜 残る桜も 散る桜 [良寛 (1758-1831) の作とされるが異説もあり。]

この俳句に想定される好意的意見と批判的意見を記述し、最後にあなた自身の意見で締め括ってください。(600字以内)